

# 初期母子関係の発達と愛着の問題

鯨 岡 峻\*

Takashi KUJIRAOKA

Development of Early Mother-Infant Relationship  
and Some Problems of Attachment

## はじめに

筆者は最近、初期母子関係の発達を間主観的關係の発達として捉えることの必要を説く一方、そのような関係に迫る方途として、関与しながらの間主観的な観察の必要を提唱した(鯨岡, 1987, 1988)。これは一言で言えば母子間で間主観的に感じられる様々な広義の情動が、母子の関係を型取るものであり、研究者は母子の関係の場に臨んで、この広義の情動の動きを間主観的に把握することが可能であり、また必要だということである。

ここで広義の情動の把握とは、例えば、<じっくりくる><ゆったりした><せかせかした><落ち着いた><リズム感のある>等々の力動的様相の感知 (Stern, D. N. (1985) の言う *vital affect* に対応する) から、<安心した><不安げな><嬉しい><可愛い><可愛げがない><腹立たしい>等々の感情の感知、さらには<信頼感がある><不信感がある><自信がある><自信がない>等々の主観的内容の把握を含むものである。

本稿は、これら旧稿での論考を踏まえながら、最初の数カ月の母子関係の発達を愛着関係の発達という観点から整理してみようとするものである。

## I. これまでの愛着研究：

特にAinsworthのstrange situationとの関連で

### <愛着研究の端緒>

生れて間もない乳児が母親 (significant otherとしての養育者) に愛着するようになることの意義については、Freud, S. (1905) の口唇期 (oral phase) の考察以来、

\* 島根大学教育学部教育心理学研究室

広く精神分析学の文脈において論じられてきた。

Freudのリビドー論の見地からすると、母親は乳児の欲求を充足する限りで愛着対象 (primary love object) たるにすぎない。しかし、Abraham, K. (1916) の口唇サディズムの考察を踏まえた彼は、既に『悲哀とメラニコリー』(1919)において、口唇期後期の乳児が愛着対象である母親に両価的 (ambivalent) 感情を抱くことを指摘した。Klein, M. (1932, 1934), Fairbairn, W. R. (1941, 1952), Winnicott, D. W. (1965) 等の対象関係学派の問題意識は、つまるところFreudのこの問題に帰着する。すなわち、対象関係学派にとって初期の母子関係は次の3点を巡って展開される。①乳児はまず特定の人にとっかりと愛着する (愛着対象にポジティブなイメージを抱く)。②その同じ対象にネガティブな感情を抱くことが起こる。③乳児は同一の対象にポジティブ、ネガティブ両方の感情を持つことに何らかの仕方に対処しなければならない。

このような記述の仕方をするると、愛着は子どもが母親に対して抱く一方通行的な感情にすぎないように思われるが、Kleinはともかく、FairbairnやWinnicottは、子どもの抱くポジティブ、ネガティブな感情が母親(養育者)の関わりや感情と深く繋がっていることを見落としてはいない。つまり彼らにとって愛着 (依存) は最初から関係論的な概念なのである。

このような対象関係論の見地のポイントは、第1に、愛着が子どもの母親に対する行動の点からというより、むしろ感情の点から考えられていること、第2に、少なくとも乳児期後期以降は、その感情が両価的なものと考えられていること、第3に、乳児の母親に対する感情が母親の態度 (母親の抱く感情) と不可分のものと考えられていること、以上の3点である。

他方、Freud, A. & Burlingham, D. (1943), Spitz, R. A. (1945), Bowlby, J. (1951) 等を始めとする施設児研究ないしホスピタリズム研究の文脈においても、愛着問題が盛んに議論されてきた。この文脈では、「重要な他者」がどういう意味において重要なのか、言い替えば母親のどういう機能が重要なのか、あるいは愛着することによってどのような発達上の意味があるのか、これらが焦点の問題点となる。

今日、Ainsworthのstrange situationとの関連で1歳前後の愛着行動が取沙汰されることが多いが、しかしAinsworth自身は、乳幼児の対象関係(母子関係)の質を評価する目的で、strange situationでの乳児の行動を捉えようとしたのだということを再確認しておく必要がある(Ainsworth, 1969)。

#### 《strange situationにおける愛着行動》

Ainsworth等が考案したstrange situationは、今や行動科学的な愛着研究が決まって参照する重要な研究パラダイムとなっている。確かに条件整備された一つの状況設定は、文化間比較や年齢間比較を可能にした点だけでも、十分意味のあるものである。このことは、彼女らの最初の研究以来、約20年間に膨大な数の愛着研究が輩出されたことから明らかであろう。

しかしながら、一つの研究パラダイムとして機能した分だけ、それは愛着研究そのものを大きく枠付けたことも否めない。「愛着すること」をどのように考えるかが放棄されて、あたかも愛着とはstrange situationで測定される一定の行動であるかのような錯覚が醸成されつつあるようにも思われる。

Ainsworthの狙いそのものはよく理解できる。彼女は1歳前後の乳幼児の母親への愛着のあり方を、①分離不安 ②人見知り(strange fear) ③安全基地を背景に外界に興味を向けていくこと、の3つに投影して把握しようとした。その限りでは、彼女らの研究はSpitz, Bowlbyの延長上にあるとみてよい。すなわち、第1に、見慣れない環境で母親が急に不在になったときに不安げな様子を示すこと、第2に、そのような環境で見知らぬ人がそばにきたときに落ち着かない様子を示すこと、第3に、そのような環境でも母親がそばにいれば安心して外界に興味を向けていけること、これら全てが子どもが母親に安心して愛着していることの証拠だというわけである。

これら3つの観点から、子どもが愛着しているかどうかを行動科学的に(操作的に)定義し、これによって、十分愛着している子ども(Bタイプ)、愛着が十分でない子ども(Aタイプ)が見分けられることになる。しかし

ながら、分離不安喚起、人見知り喚起の場面では行動的定義にしたがって愛着していると見られる子どもが、母親と再会した場面で泣き止まないとか、玩具を用いた遊びに戻らないとか、母親を恨みがましく見る等々の、行動的定義では十分愛着していないことになる行動を示す場合が少なからずあることが見出された。AinsworthらはこれをCタイプと呼び、Bタイプを安心して愛着している(secur attachment)と見るのに対して、Cタイプを不安げに愛着している(insecure attachment)と解釈した。

ここに3重の問題がある。一つは、このような解釈が本来、母子の関係に関する研究者の間主観的な感知を土台にしていることである。言い換えれば、secureないしinsecureの定義そのものが、当の母子の関係の場に臨んだ研究者に、「安心感が感じられる=伝わってくる」「安心感が乏しい、あるいは伝わってこない」というふうに、間主観的に感じ取られたものに基づいているはずだということである。確かに、secureないしinsecureは行動的に定義されてはいる。そして一旦そのような行動的定義がなされれば、後は当該の行動があるかないかによってsecureないしinsecureが決まるというのもうなずける。が、行動的定義に間主観的感知が先行すること、このことが行動科学の文脈ではしばしば忘却され、そのために議論が錯綜することになるのである。繰り返して言えば、insecureはこれこれの行動があるからそうだというのではなくして、まずもって間主観的にそのように感知されたということなのである。

これとも関連するが、もう一つはBタイプ、Cタイプの分類基準の妥当性がどうかという問題である。既に比較文化的な諸研究によって、Cタイプの表われ方が文化によって異なることが知られている。ところが、Bタイプ、Cタイプの分類は差し当りは行動の型によるものなので、それぞれのタイプの表われ方が文化間で異なる事実が果たして愛着の内容の違いにそのまま対応しているかどうかは吟味を要する。言い換えれば、Ainsworthの間主観的感知に基づいてsecureないしinsecureと定義された行動型が、どの文化の研究者の目にも、secureないしinsecureというふうに間主観的に感知されるかどうかという問題である。とりわけCタイプの場合に問題が起こってくる。

最後の問題は、Ainsworthの愛着の定義がもっぱら子どもの行動によってなされていて、その場での母親の応対のあり方に言及されていないことである。もっとも、Ainsworthは「いま、ここ」における愛着関係を問題にしたかったのではなく、むしろ1年間に母子が「培ってき

た」関係がこの状況下に結晶してくる場所を取り押えたいということだったのであろう。子どもの行動に母子のそれまでの関係が積み込まれているのだから、子どもの行動を押えれば関係を押し戻したことになる、というのが彼女らの言い分に違いない。

しかし、「積分された関係」はstrange situationのパラダイムでは「いま、ここ」においてしか現出しえない。従って、secure, insecureの判断は「いま、ここ」の母子間の間主観的な関係の感知に基づく他はない。この点に立脚するならば、子どもの側の行動の型だけを押し戻せば母子のこれまでの関係全体が押し戻されるという考えそのものが吟味されなくてはならない。実際、子どもの側に安心した愛着を感知するのは、母親の側にゆったりと落ち着いた包容的な態度を感知することと無関係になされるとは考え難いし、不安げな愛着なるものも、母親の不安げな態度あるいは苛立った態度と無関係に看取されるとは思われない。Takahashi, K. (1986)はこの点に触れて、日米間比較において、日本の母親は再会場面で乳児が抱付いてくる以前に母親が抱き上げてしまうことが多いことを指摘し、Ainsworthのstrange situationが日本においては過度に不安喚起的なものではないか（母子双方にとって）と示唆している。

要するに、secure, insecureは母子の「あいだ」の問題なのである。

#### ＜対象関係論の文脈で見た愛着＞

前項で、Cタイプの判断が問題をはらんでいることを示唆しておいたが、これを突き詰めれば、そもそも愛着するとはどういうことなのかを問い直すことに繋がるだろう。

先にも見たように、Ainsworthはこれを分離不安や人見知りとの関連で考えようとした。それ自体は、SpitzやBowlbyの研究との関連で了解することも指摘したとおりである。しかし、精神分析的な文脈で考えるなら、分離不安や人見知りとの関連ばかりでなく、対象関係論的文脈においても愛着問題は考えられてしかるべきである。

とりわけ、Ainsworthが問題にした生後1年前後は、対象関係論的には母親の2重性(Kleinの「よい乳房、悪い乳房」)が統合されて、乳児が母親に両価的感情を抱くようになる時期に対応する。言い換えれば、母親への一方での愛(対象希求的欲求ないしはリビドー的欲求の充足と結び付いている)と、他方での、それらの欲求が満たされないことからくる不信感(恨み、つらみの感情)が重ねあわせられ、愛の裏側には不信が、不信の裏には愛が

同居するようになって、もはや、いついかなるときにも専らなる愛を母親に向けるわけにはいかない。これこそ、この時期の乳児の主観内の事実として対象関係学派が取り上げたいことである。

この観点に立つとき、最も深く愛を向けた乳児ほど、依存欲求が満たされないときの恨みもまた最も深い、ということが考えられないだろうか。我々はややもすると愛着をそのポジティブな側面でのみ考え、愛着することと全体が抱えているproblematiqueを捉え損ねるきらいがある。このことが、先のCタイプの問題と絡んでいるように思われるのである。

例えば、再会場面でしがみつきにいきながらも泣き止まない、恨みがましく見て寄り付かない、等々の行動も深く母親に愛着している子どもが、不安が喚起されて強い依存欲求が生じたときに、本来それを満たしてくれるはずの母親が適時に現われてくれないことへの不満や恨みの表現として解釈することが可能ではないだろうか。というよりも、そのような母子の関係の場に臨んだときに、我々は「不安げな愛着」と感じるのではなく、むしろ「深い愛着」ないしは「強い愛着」と感じる場合があるのではないか。確かにそれはsecureと感じさせるものではないかもしれない(間主観的感知においてsecureと同型的ではない)。その限りではBタイプのカテゴリーに入れることは難しい。しかし、これが間主観的感知においてinsecureと判断されるかどうか(Ainsworthの場合はそのように判断されたということなのだが)は、大いに問題となるところである。

#### ＜愛着の深さないし強さという観点＞

Ainsworthは愛着の質を問題にしようとした。それはそれで重要な視点であるが、しかし、A、B両タイプにそれぞれ一定の幅があると考えれば、そこに愛着の強さという量的な次元を考えることも許されるはずである。この観点に立てば、従来Cタイプと分類されてきたケースの中には、愛着の強さにおいてA、B両タイプの中間にくるものと、その次元のB側の最端に位置付けられるものがあるのではないかとこの予想が成り立つ。

この予想については今後実証的な裏付けを得る必要があるが、我々が当該母子についてstrange situation以外の場での関係を知悉しておれば、insecureという意味でのCタイプへの分類が妥当であるかどうかは、相当に明確な判断ができるのではないだろうか。

「不安げな愛着」という考えは、精神分析学の文脈では子どもの側の神経症的態度を指すものとして理解される。例えば、幼稚園期になってもいつまでも母親から離

られないのは、幼稚園に通わせようという母親の表向き態度の背後に、いつまでも自分に依存してほしいという母親の欲望があって、その欲望に子どもが添おうとしているからだ、と解釈されるような事例がある。このような場合、子どもは母親に真に愛着しているわけではなく、母親の欲望に自己を譲り渡しているにすぎないことになる。

しかしながら、母親から離れられないで母親に纏わり付くような行動がみられるこのような場合に、我々は間主観的には「愛着が十分でない」とか「おぼつかない愛着のしかただ」と感じ取る。言い換えれば、愛着の一つの型と感ずるのではなく、むしろ愛着が不十分と感ずてしまう。このような間主観的な感じこそ、愛着の質を問題にするときの決め手になるのではないかと、というのが我々のかねてからの主張である。

\* \* \*

以上、Ainsworthのstrange situationとの関連で愛着研究の問題点を概観してきた。一連の考察を通して明らかになったのは、「愛着している」ということの判断が研究者の間主観的な感じに根ざしていることである。この「感じ」は観察者の恣意ではない。それは観察者が勝手に生みだしたものではなく、むしろ観察対象から「送り込まれてくる」ものである。この「感じ」は何らかの手掛かりに基づけられているが、しかしこれらの手掛かりの総和がこの「感じ」そのものなのではない。その意味では、この「感じ」は完全に対象化＝客観化し得るものではない。この「感じ」は公共性に向かって完全に閉じられた私秘的なものだというわけではないが、観察者の「暗黙の枠組＝文化的枠組」に依拠している面もあって、同一文化内では公共的に承認され得ても、異文化間では「感じ」が同じにならないという面も持ち合わせている。

「愛着している」ということがこのような間主観的な感じと切り離して考えられないものとするれば、愛着現象は観察対象の性質であると同時に、観察者の「暗黙の次元」との相関項でもある。従ってこの問題に切り込むためには、我々はいわば「愛着の現象学」を必要としているわけだが、ここでは誕生以来の母子の関係の中で、愛着関係が次第に顕在化していくプロセスを追いかけるにとどめざるを得ない。

本稿では、旧稿で触れた「関与しながらの観察」を方法とし(鯨岡, 1986b), 具体的な母子の関わりの方場の観察および母親インタビューから得られた資料を駆使して、誕生後から数カ月間を跡付けていくことにする。

## II. 愛着関係の成り立ち

### 《テーゼの定立》

最近の知見によれば、新生児期に既に母子間に行動的同期性がみられるという (Condon, W. S. & Sander, L. W., 1974; Trevarthen, C. 1975など)。胎内において外部の音がよく聞こえること、また外部の音(例えば甘美な旋律の音楽)に胎児が反応することは既によく知られているから、母親の固有のリズムに新生児が同期する事実はそれほど驚くべきではない。また新生児が自分の母親の匂いを他の女性の匂いと弁別して好むという事実も、一種のインプリンティングと考えれば理解不可能ではない。そのような、最近の行動科学的発達研究が新生児や早期乳児期について明らかにしてきた諸事実は、いずれも生れて間もない乳児の高い能力性を示している。

そこから多くの研究者(Brazelton, 1984など)は、それらの諸能力を生得的社会的能力とみて、その能力に裏打ちされた行動的同期の事実が母子間の「絆」の実質をなすものとする。

なるほど、「身二つ」になったとはいえ、かつては「一つ」であったことの徴はいくつもの事実に現れている。例えば、生後25日の乳児の空腹の泣声に母親の乳房が感応する事がある。サーモグラフィによって、乳児が泣く前の母親の乳房の表面温度を計ると、35度7分であったが、乳児が泣き出すと表面温度はほとんど上がり、2分後には36度8分までになった。このとき母親には「お乳が張ってきた」という感じがあるのだという。

この見事なまでの感応的關係がその後の母子関係と無関係だとは思わない。しかしながら、このような同期的感応的關係から直接その後の母子一体となった共生的關係が展開をみるのだろうか。また、この出発点でのつまづきは修復不可能なのだろうか。

我々の観察事実は、誕生直後からの「母子共生的」關係を示していない。従ってまた、誕生直後から愛着關係が成り立っているわけでもない。乳児が母親と相互作用するための生得的裝備を備えて誕生することはその通りだとしても、それによって半ば自動的に母子の關係が円滑に展開されるわけではないのである。我々はこの間の事情を次の第1テーゼによって表現する。

第1テーゼ：誕生時から母子共生があるのではなく  
共に生活する中で共生的關係が生れる

次に、他のところでも述べたように(鯨岡, 1988), 行

動的な同期的關係を導き支えているのは広義の情動過程である。行動的關係の発端は何であれ（乳児の側の泣きであれ、母親の側のあやしかけであれ）、その発端から以降の關係の展開は、冒頭にも述べたvital affectの感知に基づいている。母子が生活していく中で次第に愛着關係を築き上げていくのは、このような広義の情動過程に両者が浸され、それに導かれ、相互に関わりを調整していくことによってである。この間の事情は以下の第2テーゼによって表現される。

第2テーゼ：母子相互の声、表情、所作、匂いは一体となって相手の中に情動的反響を呼び起こす。この情動的反響が次ぎなる行為を導く。

以下、時間経過を追いながら、これらのテーゼを裏付ける諸事実を見ていくことにしたい。

### 1. 新生児期

新生児期の乳児は、これまで、いくつかの原始反射の消長、脳幹部の生命維持機能に支配された比較的节奏のある生命活動、の2点によって特徴づけられてきた。

この新生児のイメージがあるためか、精神分析学派においては（Freud, S. 1916）、乳児期初期の子どもは何らかの「刺激防御壁」によって外界から遮断され、自足的な宇宙に生きてるとみなされてきた。従って誕生直後からの同期的關係など彼らにとっては考え難いことであった。この点に関して、新生児期の生得的能力に関する最近の行動科学的発達研究の成果はきわめて意義深いものといわねばならない。

しかしながら、Bower, T. G. R. (1979) の言うように乳児が生得的な社会的能力を携えて誕生してくるのが本当だとしても、そこから直ちに共生的な母子關係が成り立つと考えるのは明らかに行き過ぎである。

#### 〈ある母親の証言〉

以下は、現在第1子が2歳になった母親（K・Y）の出産直後の頃の回想である（面接インタビューに応じてくれたもの。その時点で母親は28歳）：

「産まれてしばらくは無我夢中だった気がします。退院して実家でしばらく過ごしましたが、M子はきちんと4時間おきに目覚めてミルクを要求しました。泣声は穏やかな感じでありイライラさせるような声ではなかったですね。姉たちの育児を見てきましたから

オムツ替えやお湯の使い方など大体知っていました。それに母も手伝ってくれました。

産後の回復が少し遅れていたので、M子が眠れば私も眠るという具合だったと思います。母乳は少しは出たのですが、量的に足りないようで、じきにすべてミルクになりました。ただ乳首をM子が吸ってくれればやはりとても嬉しかったです」

「母親の実感というのは……いつ頃からでしょうか。実家に戻ってきて数日たって、朝、目が覚めて横を見るとM子がまだ眠っていて、その寝顔を見ているときに、ふと『自分も母親になったんだなあ』という感じは確かにありました」

「今から思えば、関わりはぎこちなかったでしょうね。でも日を重ねるにしたがって、慣れてきますし、それにM子がいろいろに反応してくれるので、だんだんやりやすくなりました。そうしているうちに、どういふふうに扱えばM子が気持ちよさそうにするか掴めてきましたね。最初は泣声の意味がわからなくて、ミルクだろうか、オムツだろうか右往左往する感じなのですが、そのうちに『ああ、これはオシッコだな、これはウンチだな、これはお腹がすいているんだな』と自然にわかってきます。

オシッコの時は、出るときに気持ちが悪いのか、ちょっとかん高いトーンで少し泣いて、後は小さな声になりフニャフニャという感じです。ウンチは、これも出る前にお腹が張るのが泣きますが、その時オムツを外しても何もしていません。ところが後で真っ赤な顔をしてきばりだし、出てしまえばもうケロリです。お腹がすいたときは、これはかなり強く訴えるように泣き、ミルクを与えるまで泣き止みません。ミルクを与えるのが遅くなると大きな声になって、怒ったような感じになります。それからミルクを与えても、ヒックヒックすすり上げて、うまく飲めなかったりしますがそれでも必死に乳首に吸い付いてきます」

「1日の生活がまずミルクの時間で規則的になります。そこにオムツ替え、外気浴、沐浴、私の食事が挟まる感じです。生活がパターン化されている点では楽なんです。しかし気持は四六時、大袈裟に聞こえるかも知れないけど寝ているときさえ、子どもに向けさせられているという感じで、しんどいことはそれはしんどいですよ。それまで自分の時間を自由に使えたのが、赤ん坊の出現で、赤ん坊が私の時間を支配している感じなんです。自分が自分の世界の中心だったのが、赤ん坊が私の世界の中心にいて私とその周りを回るといふ具合です」

「眠っているときに笑ったような感じになったり、あくびをしたり、沐浴したときにいかにも気持ちいいという表情をしたり、生後まもなくでも、赤ん坊は表情豊かです。皆がM子の顔を代わる代わる覗き込むと、M子も物珍しそうにキョロキョロ大きな目を開けて見ます。授乳の後はいつもしばらく起きているので、そのときベッドに寝かせて『Mちゃん……』とおしゃべりしていると、口を開けて、かすかに『オー』と声を出したことがありました。このときには(2カ月時)、私が話し掛けたときにM子が『オー』言ってくれたと、何か通じ合えた気がして、嬉しくて、皆に『M子がお話しをした』と言って回りました。それからは、M子に『オーオー』を言わせたくて、M子に話し掛け、そうしてよく遊びました。また、同じ頃、こちらが話し掛けるとじっと見ていてまだ声は出ないのですが、唇がにっこりとほころんだときも、嬉しかったです。3カ月になって、あやすと声を立てて笑うようになり、M子の相手をするのがそれまでのおっかなびっくりとは違って、ぴったりくる感じになり、人間らしくなったM子が本当に可愛く思えてきました」

以上のような母親の話しこそ、Winnicott (1965) の言う primary maternal preoccupation の内実であろう。確かにこの時期の母親は生れてきたばかりの乳児に没頭している。そして多くの研究者が言うように、この没頭＝傾倒を可能としているものに、身体生理的要因があることは否定できない(例えば、泣きたい乳房の感応は、新生児期を過ぎると弱まるとか、夜の授乳のためにぱっと目覚めて授乳後直ちに眠るというようなパターンが、新生児期を過ぎると弱まってくるような事実は、「身二つ」後のホメオスタシスの回復と軌を一にしている：Greenspan, S. I., 1981など)。

このように母親の側の身体生理的要因を過大評価し、乳児に高い社会的能力を前提すれば、新生児期の母子関係は、母親の意志や努力といった母親の主観的要因とは半ば無関係に、一種の生物学的過程として進行していくかのようにイメージされやすい。そしてそこに、Werner (1948) の「未分化から分化へ」という一般発達原理が重ね合わされると、母子一体、母子共生という考え方に傾きやすい。

しかし、そのようなイメージのために、母親の主観的側面は著しく軽視されてしまうことになった。上の証言は、母子が一つの狭い空間を共有した生活の中で、共生的関係を少しづつ築き上げていくのだということ、そしてそこに母親の意志的な傾倒が重要な役割を果たしてい

ることを示していないだろうか。

個体と個体の間の行動的同期性にしても、第3者の立場から眺めたときにそのように言えるのであって、その同期する事実が母親の主観の中でどのように受け止められているのか、従来はこの観点からの考察が決定的に欠落していたように思われる。

この母親の証言を聞くと、まず第1に、母親の関心は子どもの行動(音に反応した、手や足を動かした、あくびをした等々)の上にあるよりも、むしろ子どもの気持ちないし子どもの広義の情動状態(機嫌がよい、気持がよさそう、機嫌が悪い、満足している、せっついている等々)の上にあることがわかる。もちろんこの種の情態感得(herausfühlen: Klages, L. 1950)は、子どもの声、行動ないし所作、表情、匂いを基にしたものである。しかしそれらに基づきながらも、声そのもの、所作そのものとして意識されるのではなく、直接的に情態が感得されるという具合になっている。それゆえ第2に、母親の関与を導いていくのはこの感得された子どもの情態であることがわかる。

新生児期が母子相互の生物学的相互作用過程として特徴づけられるより、我々の見るように、それを土台にしながらも、そこに母親の情態感得の要因が深く入り込んでいるとすれば、母親のこの初期の傾倒的関与のあり方が、母親の心理的ストレスの多少、つまり母親が周囲他者との力動的関係の中で感じるストレスの多少に左右されることが予測できる。言い換えれば、一見平穏無事に進行するかに見える新生児期の母子関係は、生物学的過程によって保障されているのではない。母親の関与を導くのに乳児の側の何らかの応答が必要だということを認めてもなお、母親の傾倒的努力がなければ初期の母子関係は維持できない。この自明とも思える点が忘却されて同期する行動面だけ取り出され、母子の関係が自動的に進行していくと見るのは明らかに間違いである。本稿では取り上げないが、初期の母子関係が芳しい展開を見せない臨床事例に接してみると、通常健康な母子関係において「ごく当然のこと」として繰広げられることの背後に、「いつも、既に可能なこととして」その関与を導く母親の作動志向性(intentionelle opérante)があることを見逃してはならない(鯨岡, 1986 a, 1986 b 参照)。

## 2. 2カ月から3カ月

新生児期にも乳児に対する母親の特権性を示す事実(母親の匂いを他の人の匂いより好む)があるとはいえ、それがはっきりしてくるのは新生児期を過ぎてからである。今や母親の声、抱き方や扱い方、匂い、(もしかした

ら母親の顔の特徴も)などが手がかりになって、母親は乳児にとって特権的な存在になりつつある。以下に、2カ月になるN・S児(男児)と母親の関わり場面をVTR記録から抜粋しておくことにしよう:

母親は目覚めたN児の肌着とオムツを換え、N児をベビー・ラックに座らせると「ボク、おはよう。今日はいい天気ですよ。おんもへ行こうか。ボク、元気ですね。ご機嫌ですね」とN児の顔を覗き込むようにして話しかける。するとN児は「うー、おー、うーあ」と声を発する。母親は「そうですか、ボクはお話ができますか」と嬉しそうに対応する。4カ月児のように表情豊かな応答とは言えないが、応答の感じは十分あって、機嫌の良さが感じ取れる比較的ピッチの高い声の調子である。顔面の表情の動きよりも声の表情の動きが前景に出ている感じである。

そこで父親に頼んで母親が言ったのと同じ言葉を掛けてもらったところ、N児は先程のように頻繁に声を発せず、また発したときも先のようなピッチの高い声ではなく、ピッチの低い、聞いている者に快の調子を感じさせない声であった。また顔の表情も最初は少しとまどったような感じであったが、後には難しい表情に変わってしまった。

誕生後60日前後で既にこのように母親が特権的な存在になるメカニズムはどのようなものなのか。母親と父親で違った結果になるのは女性と男性の声の質の違いによる、という説明もかつてはあった。しかし、母親以外の女性が関わった場合にも、どこか母親の時とは明らかに違う声の出し方をしてくるのである。

かつては授乳と母親の特権性とか結び付けられて考えられた時代もあった。今日はBower(1979)に代表されるように、むしろ社会的関係を担う人、つまり相手をしてくれる人としての母親とその特権性とか結び付けられているようである。

しかしながら、母子の日常を間近に見ていると、授乳か相手をする事かというような2者択一は当を得ていないように思われる。実生活においては、この両者は切り離しがたく結び付いているからである。ミルクを飲ませる前後に乳児の相手をしない母親は、日本においてはまずほとんどいないだろう。再びN・S児のVTRから記述してみよう:

母親はベビー・ラックの横でミルクを作りながら、「ボク、もうすぐ、ミルクですよ。いい子ですね。も

う少し待ってくださいね。さあ出来ました。たくさん飲んで下さいね」と話しかけ、準備のできた哺乳瓶を傍らに置いて、N児を左腕に横抱きにした。乳首を近づけるとN児は予期反応を示して口を開きかける。乳首を含むとぐいぐい飲み始める。最初は目をあきながらも、何も見ない、何も感じないというふうで、一心に飲むことに集中している(そのとき、奇妙な、独特の表情になる)。この間、母親はN児のミルクを飲む呼吸に合わせるかのような息遣いになっているのがわかる。ひとしきり飲んである程度満足したのか、N児は一息入れて、飲むのを止め、母親の顔を見あげる。先程の表情とはっきり違っている。それまで黙っていた母親は「もういりませんか、少し残っていますね、はい、ちゃんと飲みましょうね」と言葉を掛けながら哺乳瓶を少し動かしてやるとN児はまた飲み始める。

しかし、しばらくするとまた飲むのを止めて、母親を見、哺乳瓶をくわえたまま「うー、んー、うーう」と声を出し始めた。「これ、遊んじゃいけません、お話しは全部飲んでからにしましょう」と母親が再び声を掛ける。哺乳瓶に添えた手の指がよく動く。

少し飲み残したところで母親はこれ以上飲ませることを諦めたのか、口の周りをガーゼで拭って「ごちそうさまね」と言うと、N児は満足そうな顔をして「あーう、あーう」と声をだす……

このような母子の関わりを見ていると、従来、母親が特権的な存在になるのに重要なのが、授乳か皮膚感覚か(Harlow, H. F. 1959)、授乳か社会的相手か(Bower, 1979)というかたちで議論されてきたこと自体が無意味に思われてくる。というのも、自然な関わりの中でこの3つは分かち難く結び付いているからである。単なる授乳、単なるスキンシップ、単なる(機械的な)相手などというものは、いわゆる「傾倒的な母性的関与」には無いのである。

母親はその関与全体を通して子どもの情態を主観的に感じ取っている。また子ども、そこで「飲む」「皮膚接触する」「相手になってもらう」というだけでなく、いくつかの先に述べた広義の情動を経験しており、しかもこれが母親に通底して母親の関与を引き出す形になっている。

Anna Freudのハムステッド戦時乳児保育所の研究や、Spitz(1950)の研究に代表される一連のホスピタリズム研究、および、Harlowの皮膚感覚研究は、この3つが分断されたとき、どのような問題が生じるかを明らかにしたものと見る事ができるのではないだろうか。

そのような意味で、以下にN乳児院でのVTR観察記録から、保母と乳児の関わりを記述してみよう：

「A男（3カ月）が泣いている。たまたま職員がおらず、誰も関わってくれる者がいない。それでもA男は泣き止まずだんだん泣声が大きくなった。用事で場を離れていた職員が戻ってきて、「よしよし」と声を掛けて抱き上げた。他にもグズグズ言っている乳児がいる。その職員はA男を抱いて体を揺すってやりながらベッドの様子を見て回り、グズグズ言っている子に声を掛けたり、メリーをその子のところに持ってきて回してやる。しかし、小さい声でクスクス泣いている子や、黙って目を開けている子には、『・・・ちゃん起きているのね』と声を掛けて通り過ぎてしまうだけである。子どもに話し掛け、その子から応答を引き起こそうという関わりにはなかなかならない」

「B子が泣き始めた。声はか細く訴える力が弱い。職員は今C助にミルクを飲ませていて手が離せない。『Bちゃん、すこし待ってね、もうじきC助ちゃんがすむからね』と声を掛けてB子の方を向く。その間、C助への授乳に気持が向かわなくなってしまう。C助はもくもくと飲むだけである。そのうちに、B子は泣き止んでしまった。C助がミルクを終えかけた頃、今度はA男が大きな声で泣き始めた。職員は『おお、よしよし、いまAちゃんもミルクにするからね』と応えて結局A男に関わるようになった。B子はもうすっかり泣き止んで辺りを見ている」

乳児院でしばらく観察してまず気付くのは、関わってもらう子とそうでない子が比較的是っきり分かることである。職員数が限られているせいでもあるが、関わってもらえるかどうかを分けるのは、子どもの要求や泣きが強いかどうか（A男がそれである）、あるいは子どもの相貌が余程可愛いかである。おとなしく、要求を出しても強くない子の場合（B子がそれである）、結局無視されることが多い。

第2に、職員の関わりが家庭の母親と比べると機械的になりがちで、子どもの情態に気持を向けてしっかり関わる機会が相対的に少ない。それは職員個人の資質や力量に問題があるからという以前に（その問題もあるのだが）、職員が一度に複数の子どもの世話をしなければならない環境があるからである。家庭児であるN児の場合には、母親はN児が抱かれやすいように（と言うことは自分が抱きやすくしっくりくるということでもある）抱き、気持をN児のミルクの飲みに向けながら（N児の飲む呼

吸に合わせて自分も呼吸をする）、そうして授乳していた。これと比較すると、乳児院では、抱っこして授乳するというパターンはあるものの、気持が他児に向かうことが多いために、抱き方も気持の向き方もミルクを飲んでいる子どもにとって最適状態とは言えなくなってしまうことが必然的に多くなる。

乳児院の子どもの多くが、相手をしてくれる人であれば誰でも良く、また誰にでも抱っこを要求して人見知りあまり見せない事実と合わせて考えると、一般に母親が特権的な存在になるのは、何よりもまず関わりの中で気持を子どもに向けているからであろう。

以上のことをふまえて共生的関係に移行していく様子をスケッチしてみよう：

#### 《共生的関係への移行》

心地よく抱かれて（これは誕生以来母子が築きあげてきた関係である）お乳を飲むとき、乳児は「満足した」「心地よい」と感じる（我々はそのことを間主観的に感じ取ることができる）。あるいは不快を取り除いてもらったり（オムツ替え）、お湯を使ってもらったとき、乳児は「気持よい」と感じる（これも、乳児が気持よさそうに足を伸ばしたり、気持よさそうな表情をした時に、その情態がこちらに通底して、こちらも気持ちいいような感じになってしまうことからわかる）。

他方、このようにして与えられる快の欲求充足は、関わる人は、いつものリズム、いつもの匂い、いつもの感触、いつもの声、いつもの顔の人であって欲しいという乳児の「対象希求的欲求」（Fairbairn, 1954）を同時に充足させてもいる（我々はここにいる対象が産みの母でなければならないとは考えない。しかし、乳児院の観察事実や、これまでの諸研究を踏まえれば、乳児は関わってくれる人が頻繁に変わるのを嫌い、特定の人であることを欲していると仮定せざるを得ない。その意味で、我々も「対象希求的欲求」を認める）。

ところで、このような「満ち足りた」「心地よい」という乳児の情態は、声や表情や所作ににじみでる（だからこそ我々はそれを感じ取ることができる）。N児の事例に見られたように、母親の働き掛けに対してN児はピッチの高い、聞く者に「嬉しそうな」と感じさせずにはおかない声を発する。このN児の情態は母親に通底して今度は母親の内部に情動的反響＝感応を引き起こす。そして母親の意識には「お話しができた」という主観的印象を醸し出す。

この逆に、母親が感じている情動は母親の声や表情や所作ににじみ出、これがまた乳児に通底して、乳児のな



かに情動感応を引き起こすこともある。母親が嬉しそうに話しかけると、その声、子どもの扱われ方が一体となって、その行動が持つ「相貌」がいわば通相的に乳児に捉えられる。

このような情動共有的、情動浸透的な関係において、ポジティブに受け止められた人が、乳児にとって特権的存在になるのである。このように見てくれば、未分化な母子一体状態から母子の分離へという図式によって初期の母子関係の発達を理解すべきではなく、「身二つ」の状態から共生的関係への移行という図式で理解すべきだと思われる。この移行を可能にするのは上に示した情動共有的な諸経験であるが、これらの経験は、通常の場合には母子が一つの場を共に生きるということ、つまり、「一緒に生活する」ことによって、自ら（自然に）可能になるように見える。しかし、初期の母子の情動共有は母親が子どもを受容し（包容し）、絶えず子どもの方に自分の気持を向け、そのようにして子どもの世話をするという「母性的関与」を前提にしてしか可能ではない。乳児院の例に見られるように、なるほど「抱っこきれながらの授乳」、泣けば抱きあげてもらおうという「スキンシップ」、できる限り遊び相手になってもらうという「社会的相互作用」が満たされる方向にあるが、行動水準ではそれらが満たされても、情動水準では真に通底的、共有的關係になり難いところに、今日なお「現代ホスピタリズム」が現出する理由がある。

さて、母子共生的関係への鍵を握る母親の母性的関与に焦点化してみよう。母親の傾倒的関与の度合いをFとすれば、Fは次の式に表現することができる。

$$F \approx a \cdot P + b \cdot E + c \cdot I \quad \dots \dots (a)$$

ここに、Pは母親の人格的な力を表すものであり、いわば「かつて、そこで」が積分されて結晶化したものとみなされてよい。つまり、自分自身が母親に可愛がられて育ってきたかどうか、従って自分がいま母親になろうとしているときに、自分自身の母親にポジティブな同一化を向けられるかどうか、更には、新しい経験を身に引受け母親役割を受容しようとしているかどうかの人格的態度に大きく負荷する要因である。

またEは周囲他者の「いま、ここ」において母親を支える力を表わす。例えば、夫婦の関係がうまくいっているかどうか、祖父母との関係はどうか、友人や近所の人心理的な援助を与えてくれるかどうか、これら全てが母親を支える一つの力として作用する。

最後のIは誕生当初、母親の気持のなかに受け止めら

れた子どものイメージを表わす。小文字のa, b, cはそれぞれマイナスまたはプラスの値を取る定数である。

かくして、小文字a, b, cがプラスでかつ大きいならばFは当然大きいだろう。これに対して、例えば母親が自分の母親に同一化できなかつたり、幼児期コンプレックスが出産を契機に表面化してくるようなことがあってaがマイナスになるとか、周囲他者との力動的関係に大きなストレスがあつてbがマイナスになる場合、あるいは子どもが顔面奇形を持って生れ母親がショックを受けるというようにcがマイナスになるようなときには、当然Fは小さくなるだろう。

P, E, Iは完全に独立とは言えないだろうから、式(a)は実際には単純に加算的な関係ではない。しかし母親の育児への傾倒的態度（向かう力）の由来をイメージするには役立つのではないだろうか。言い換えれば、母親の育児への傾倒は「生物学的自然」ではなく、それを可能にしている見えざる諸条件に枠付けられたものということである。

式(a)そのものは、ある時間切片における状態像を表わすものであるが、しかしa, b, cは母子関係の展開のなかで、様々に値を変動させていくと考えられるから、本来力動的なものである。そしてこの式は一般的プロセスと病理的プロセスを繋ぎ合わせて考える地平を切り開いてもある。例えば発達臨床を、子どもの障害や「問題」の除去を中心に考えるのではなく、むしろ母子関係の展開を中心に考えるとすれば、いかにしてFを大きくするか、従ってそのためにいかに符号a, b, cをマイナスからプラスに転化させるか、そこにこそ、発達臨床への心理学的側面からの寄与があると見ることができよう。この(a)式を理解するために、以下に発達臨床事例を取り上げてみよう。

#### ＜R・K児とその母親の事例＞

Rは巨大児（5100g）で帝王切開によって生れ、誕生後、低血糖による重い脳障害を被った。母親は子どもの異常と治療のプロセスを全く知らされないまま1カ月を経過し、子どもの重い障害を後に知らされて大きなショックを受けた。なお不幸なことに、この母親は夫と離婚させられる憂き目にあい、実家に身を寄せて母子だけの生活を送ることになった。この間に母親の受けたショック、また周囲他者の力動的関係において被った多大のストレスについては言をまたない。

そのような不幸な環境下にもかかわらず、それでも気丈な母親は、何とかこの苦しい状況を乗り越えようと懸命の努力をする。普通の母親のようにミルクを飲ませ、

オムツを替え……しかし、子どもからはほとんど応答らしいものがなかったという。以下は生後2、3カ月頃を回想して語ってもらった記録である。

「子どもの時のお人形さんごっこをしているような気分でした。着替えさせて、ミルクを飲ませて、オムツを替えて……いつ笑ってくれるだろう、いつ声を出して応えてくれるだろう、そう思いながら世話をしていました。1カ月、2カ月と変化がなく、ああ、やっぱり重い障害なんだなと思いました」

母子は対等な関係ではなく、母親の母性的関与が2者の関係をリードしていかざるを得ないと言いながら、しかし子どもから全く「お返し」がなくても、自然な優しい関わりが母親の一方通行の形で可能だろうか、この事例はこのことを考えさせるものであった。

残念なことに、我々は発達臨床の諸事例を生後2、3カ月頃から手掛けるという経験を持っていない。通常は2歳前後からの事が多い。それゆえ、障害乳児が2、3カ月当時のような母子関係にあったかは、殆どの場合回想に拠るしかない。そして、この頃の記憶は、明らかな奇形的障害や脳性マヒなどは別にして、通常の遅れの子どもの場合には欠落していることが殆どである。それゆえ、この頃の母子関係については想像によって埋め合わせるしかないが、母親の通常の間与が子どもには刺激として弱すぎたり、あるいは強すぎたり、あるいはまた子どもの応答性が弱すぎたりタイミングがずれたり、という具合に、行動水準で母子が絡み合わないことは当然予想できる。

しかしながら、行動水準でのそのようなずれは、先に見た広義の情動を互いに感知することの難しさに端を発しているように思われる。そのような情動的繋りの弱さはまた母性的関与を難しくするだろう。このように、子どもの1次的障害(ダウン症とか脳性マヒなど)が2次的に母子の関係の不調をもたらす公算は大きい。それゆえにこそ、心理学サイドからの発達臨床援助の可能性もあるわけである。

ここで事例として取りあげることは出来ないが、筆者が療育キャンプの夜の集いの席で耳にした次のようなエピソードもある：

「ごく普通の出産でしたけど、皆さん御存知のように口蓋裂でしてね、看護婦さんが『男の子ですよ』と言ってくれたときは、うー、よかったと思ったんですけどね、赤ちゃんを見せられたときはガーンと頭を

殴られた感じで、『こりゃ、自殺もんだな』と思いました。主人の親類からは『身内にこんな子はいない』などと言われまして、情けないやら悔しいやらで、何とか自分の手で育てないと思って、結局教員もやめてしまいました。

こんなことを言うとおの子が可愛そうなんですけれど、どうしても可愛いと思えないんですね。不憫な子だとは思いますが、自分がかばってやらなければと思って育てては来ましたが、正直言って、顔を見るのが嫌でした。母親としては失格ですが、でもそういう気持ちになってしまうんです。今から思えば教員を止めずにいた方がこの子の為にもよかったかなと思うんですが、あの子が赤ちゃんのときは、毎日イライラしていたように思います。この気持は今日までずっと続いていました。手術でかなり普通の顔になっても、やはり『可愛い』とは思えないんですね。子どもを連れて買い物などとても行けませんでした。今日このキャンプに参加してよかったと思うのは、うちの子よりももっとひどい子どもが沢山いて、それなのにお母さん方がみんな明るく優しく子どもに関わっているのを見ることができたことです。自分もあの子にはこれからそういう関わりをしていかなければならないと思います」

これは、このキャンプの時点で2歳9カ月の口蓋裂男児の母親の話である。それまで幸せな人生を送り、幸せな結婚をして、これからもっと幸せになると思っていたときに降って湧いた不幸だったという。この母親は、これではいけないと思いつつ、どうしても可愛いと思わずに普通に関わっていけなかったと述懐している。このような母親の受容できない気持が、さもないと普通に展開したかもしれない母子の関係を阻害し、それと構音障害とが重なって、この男児の言葉の遅れを現出させることになったと考えられるエピソードの事例である。

これまで見てきたのは、子どもの側に何らかの障害があった場合の母子関係の不調であったが、この不調は主に母親の側に問題がある場合にも生じ得る。このような母子関係の不調を乳幼児精神医学 (Infant Psychiatry) という立場から展望したBuxbaum, E. (1983) は次のように述べている：

「酷い扱いをする母親は、子どもの楽しみを求める欲求に調子を合わせることができない。このような母親の養育行動は、乳幼児の情態に合わせたものというより、自分の気まぐれと都合によって方向づけられており、共感性というものを欠いている。自分自身軽い

うつ状態にある一人の母親は、赤ん坊をあやしなから開いた口にスプーンで食べ物を入れた。しかし、子どもがこれを食べおわる前に、この母親はさらにもう一匙さっと口に押し込んだので、こどもは頭を後ろに引っ込めてスプーンを嫌がった。すると母親は急に立ち上がって子どもをベッドの上に乱暴に投げだし、怒りをあらわに『先生、見てください、この子はいつもこんなふうには食べないんです』と言った。このような乳幼児虐待は、ほとんどの場合にその親自身が自分の乳幼児期に虐待されていたという背景を持つ。つまり乳幼児虐待は世代間で反復されるのである。」

このような事例は、発達臨床が必ずしも「子どもの問題」とは限らず、母親および家族の問題でもありうることを示しているだろう。乳幼児精神医学の観点からする初期母子関係の問題は我々の今の関心と重なりあうが、我々の手持の資料が十分でないので、ここではこの程度にとどめざるを得ない。

ともあれ、誕生から2、3カ月のあいだの母子の関係を間近に見ると、日々のルーチン化した日常的関わりの中で母子が共々に少しずつ関係を整えていくことがわかる。基底のところでは、相互に絡み合った関係になる為の生物学的能力が前提されるにせよ、関係の展開は自動的なプロセスではなく、互いに擦り合わさって次第に滑らかな関係になっていくものであるらしい。

「愛着がある」という日本語の意味を考えてみれば分かるように、愛着は最初からそこにあるという性質のものではなく、慣れ親しみ、馴染むという、時熟を伴うものなのではないだろうか。乳児の愛着といえば、「あやす—笑う」、「抱く—抱かれる」という比較的完成した位相で考えられやすいが、そこに至るまでの、相互に慣れ、馴染む過程の重要性を見落とすべきではない。

### 3. 愛着関係の成立（3、4カ月頃）

既に述べたように、今日、行動科学的発達心理学では「愛着行動」をもっぱら乳児の側の行動事実によって乳児の側の問題として考える傾向にある。またこれを「人見知り行動」と重ね合わせて考察するので（Ainsworth, M. D., et al. 1978）、乳児期後期が話題になりやすい。しかし「身体を接触させる」「視線が合う」「抱かれる」等の行動カテゴリーに合致する行動があるかないか、その行動の出現頻度が頻繁であるかないかによって、「愛着する」ということを定義するのは問題である。

我々は「あやす—うれしい—微笑む」、「微笑む—可愛い—あやす」という情動感応的な円環的關係（図

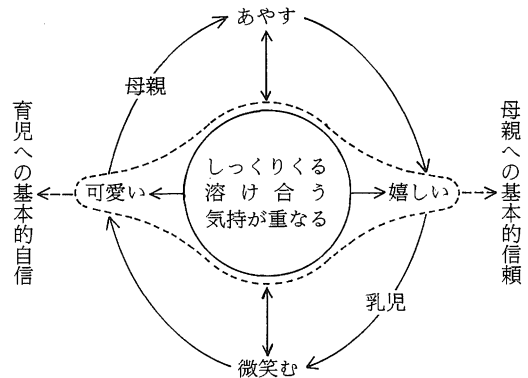


図1 母子愛着関係の概念図

1の外周)によってこそ、「愛着」という現象の成り立ちを理解できると考える。まずこの図1を説明しよう。

従来はこの図の「あやす—微笑む」という直接に観察が可能な行動的相互作用が問題とされてきた。いま同一のテレビ画面を2分割して、2台のテレビ・カメラで撮影した画像を同時に映し出すとしよう。左半分は母親の表情、右半分は乳児の顔がクローズアップで映し出されるとき、この「あやす—微笑む」という母子の行動の相互作用的性格（行動的同期性）が明らかになる。すなわち、母親の表情と声掛けのタイミング、乳児の微笑みのタイミングと発声というように、一連の関係行動を分断してそれらを時間軸上で繋ぎ合わせると、その同期の様相が浮かび上がってくる。

しかし、母子の関わり場に立ち合ってみると、「あやす」「微笑む」という行動的相互作用が前景に出てくる以前に、母子の間に「溶け合うような感じ」「しっくりくる感じ」「通底した感じ」がまずもって感じ取られる（図の中央の円内）。そのような感じ（vital affect）は母子間で共有されており、それが乳児の主観の中では「嬉しい」と、母親の主観の中では「可愛い」と感じられ、更にそれが土台となって、乳児の側では「愛着する＝信頼する」、母親の側では「愛感する＝育児に自信を持つ」といった抽象的な心的過程が成立してくるものと思われる。

言い換えれば、乳児が母親のあやしかけを嬉しく感じていること、また母親も、乳児があやしかけに応じて微笑むときに可愛いと感じていること、これらが観察者の側にも通底して、むしろこれらの情動的つながりが前景に出てくるのである。つまり、行動的には「あやす—微笑む」という縦軸での相互作用が捉えられるが、その際、母子間で「嬉しい—可愛い」という横軸での情動感応的關係が成り立ってもいて、むしろこの横軸の關係

の成立が「愛着」という現象の成り立ちを告げるものではないかということである。さらに言えば、当初は図1の外周の線で示された関係つまり、「あやす—嬉しい—微笑む」あるいは「微笑む—可愛い—あやす」というような連鎖的關係であったものが、生活の場での繰り返しの関わりを通して(馴染む過程を通して)、横軸に示される情動感応的、通底的関係へと変化してくるということなのかもしれない。

愛着という現象をこのように見れば、その成り立ちはむしろ乳児期初期=初期母子関係の問題として考えていくことが可能になる。実際、発達臨床的事例において母親への愛着を考える場合にも、我々が重要視したいのは発達の初期(時間的に初期という意味ではなく)の2者関係としての「愛着」という現象、つまり情動通底、情動感応を土台にした愛着関係である。

それゆえ我々は図1の中央の円内および点線で示した枠の中、つまり母子の「あいだ」の間主観的關係を問題にしたいのであるが、記述は活動主体に依拠せざるを得ないので、乳児の側に焦点化したときには「愛着する」と、母親の側に焦点化するときには「愛感する」と書き、その相互性、通底性として点線枠内を理解しておきたい。

#### ＜情動通底、情動感応の現象として見た微笑み合い＞

Bower (1979) は、何が原初的な社会的行動であるかという問い、また社会的行動を「事物によってではなく、もっぱら人によって引き起こされる行動」と定義することによって、この問いに応えようとした。彼は一連の「微笑み研究」を評論し、乳児の微笑みももっぱら人によってのみ引き起こされる行動ではなく、白い紙にいくつかの黒点が描かれているような物理的刺激によっても引き出されるという Watson, J. S. (1973) の研究、あるいは生後3、4カ月の乳児でも事象Aと事象Bとの随伴関係を探知できたときに明らかに微笑むという Papousek, H. (1969) の研究を基礎にして、「微笑みは本質的な社会的行動とは言えない」と主張した。この主張は半分正しく半分間違っている。

微笑みを表情パターンとしてのみ理解するがぎり、微笑みが人以外の事物によっても引き起こされることは明らかであり、彼の定義に従う限り、彼の主張は正しい。しかし、微笑みを表情パターンによってだけでなく、その表情が表出される場での乳児の情動の動きによってその意味を読み解こう(感じ分けよう)とすれば、物に対しての微笑みと人に対しての微笑み、人に対しての場合でも愛着している母親への微笑みと、それ以外の人への

微笑みとは、それぞれ明らかに感知可能な違いがあることがわかる。事実、白地の紙に黒点2つの刺激を見せるとき、確かに3カ月の乳児は微笑むような表情を示すが、しかしその表情は情感性に乏しくこちらの情動系を揺り動かすような力を持っていない。最初は少し声が出るが、すぐに出なくなり、黒点への注視もそれほど持続しない(乳児院での観察)。これに対して3カ月過ぎの乳児が母親のあやしかけに応じて示す微笑みは、文字通り「喜色満面」の微笑みであり、周りに居る者を巻き込まずにはおかないような強い情喚性を帯びていて、一見して事物への微笑みとは違うことが把握できる。

この2つの場面を対比してみると、対人場面での微笑みは、明らかに情動通底的関係において表出されていることがわかる。つまりもっぱら乳児単独であるような「喜色満面」の微笑みを示すことはない。母親が側に居て顔を乳児の方に向けながらも視線はあらぬ方向を見ているときには、乳児の側から自発的に喜色満面の微笑みを示すことはない。それゆえBowerのように「物か人か」と問いを立てること自体がおかしい。人が乳児に対して何の関心も示さずただそこに居るという場合には、乳児にとって人は物としての性格を持ちうるからである。事物と違って人が乳児に特権的な意味を持つのは、また人のなかでも母親が特権的な意味を持つのは、人が乳児と情動交流的な関係を持つとういう用意を持ってそこに現前するからであり(emotional availability)、母親がその用意において際立っているからに他ならない。言い換えれば、乳児の喜色満面の微笑みは、「母子の微笑み合い」という情動交流的関係において生じるものだというのである。

このような微笑みについての考察を踏まえるなら、情動交流的場の中で考えられる限りでの微笑みは、十分に「原初的な社会性」として理解でき、従って「社会性の発達」という文脈において、あるいは同じことだが、母子関係の発達という文脈において重要な手掛かりになり得る。我々の考えでは、3カ月を過ぎた乳児が母親のあやしかけに対して示す喜色満面の微笑みは、それまで母子が共に生活することを通して少しずつ築き上げてきた関係の織物として、初期母子関係の発達に一つのエポックを画するものである。

微笑みの表情パターンという点からすれば、既に新生児期にもいわゆる「新生児の微笑み」が見られる。これは、通常は眠っているときに、口周辺の筋肉の引き釣るような動きによって引き起こされるものである。それゆえ、これは正確には対人関係の場における微笑みとは異なるものであるが、しかし、これを見た母親が「赤ちゃ

んが笑った」と捉え、そこに満足を感じるがゆえに、この「微笑み」は結果的に社会的意味を持ち得る（微笑みの第1段階）。

生後2カ月頃になると、視線が合うようになり、そのときに母親があやしかけると、乳児は「嬉しそうな」声を出して少し微笑む。しかし、後の3カ月過ぎの喜色満面の微笑みに比べると、目が笑わないし、またに声の調子が人を巻き込むような強い情喚性を持っていない。とはいえ、この頃の微笑みは、授乳やオムツ替えや着替えという関わりの中に埋め込まれていることが多いものの「母親の話しかけ——応答」という文脈に十分位置付けられるものであり、母親には「お話しができた」「気持ち通じた」と受け止められるような、情動通底的な社会的性格を既に十分に持っている。従ってこれは母子の関係性の指標に十分になり得るものである（微笑みの第2段階）。

このようにして、3カ月を過ぎると喜色満面の第3段階の微笑みが現出してくるのであるが、ここで注意したいのは、単に表情が変化（目が笑うようになる）というばかりでなく、声が盛んにでてそれに強い情喚性を感じられるようになり、また体全体に力が入ったり、手や足に力が入ったりするという具合に、変化は表情以外にも現われている事実である。我々はこれらの手掛かり全体を通じて、「喜色満面」を感じ、その強い情喚性に捉えられて「思わず」こちらも釣り込まれて微笑んでしまうのである。若干の整理をしてみると次のようになるだろう：

表1. 微笑みの変化と母親の主観性の変化

乳 児	新生児の微笑み	2カ月児の微笑み	3カ月児の微笑み
特 徴	口が微笑むだけ	目が笑わない	喜色満面になる
母 親	母親の思い入れ	気持ちが繋った気分	情動通底的一体感

上記の表から分かるように、微笑みの変化とそれを受け止める母親の主観性の変化とは密接に関連している。だからこそ我々はBowerとは異なって、乳児の微笑みを社会性の発達の重要な指標と見なすわけである。繰り返すように、母子の間で微笑み合う関係にあるということは、同時に「気持ちが繋り合う」という主観的ないし間主観的関係にあるということの意味する。それゆえ、微笑みは我々の定義における「愛着」現象の土台をなすものなのである。発達検査やコミュニケーション・チェックリスト（例えば国立特殊教育研究所作成CLCD）には、乳幼児の愛着を評価する項目として「視線が合う」「微笑む」「声を出す」等の行動項目があがっている。し

かしながら、それはもっぱら子どもの行動事実としてあるか、ないかを問題にしている、その結果が母子間の情動交流の実体を十分に反映しているかどうかは必ずしも明らかではない。従って例えば、CLCDの愛着評価（愛着に関連すると思われる先のような一連の行動項目群全体に対する、該当項目数の比率によってなされる）において高い比率を得たという事実が、臨床的に見て円滑な母子情動交流に対応していない場合がしばしばでるのである。微笑みが母子情動交流の重要な指標となるかどうかは、従って、その記述を行動水準に止どめるか、主観的、間主観的水準に重きを置くかによって決まってくると言えるだろう。

以上の議論を受けて、いくつかの事例をみてみよう：

〈T・S（3カ月すぎの頃）の事例〉（この事例は筆者が担当した、家庭の母親向けのテレビ番組のためにSテレビ局が取材録画した際に出会ったものである）

「場面はT児が体を洗い終わって拭いてもらうところである。母親がバスタオルの上にお向けにT児を寝かせ、体を拭いてやっている。『いいきもちですね、ごきげんですね……そうですか、いいきもちですか、体ふきふきしましょうね』という母親の話しかけに（これも単調な話し掛けではなく、声に抑揚やリズムがあり、またそれに合わせるように顔をしゃくりあげるような動きが同時になされている）T児はじっと母親の方を見つめ、視線があうと嬉しそうににっこり笑って『あうー、あうー』と声を出している。テレビカメラがクローズアップのために接近してもそちらの方には気を取られることなく、いい笑顔をしながらしっかり母親の方に目を向けている。体を拭き終わると、母親はオムツをし、服を着せる。『さあ、おわりましたよ、いいきもちでしたね』『おふろはどうでしたか、いち、に、さん、し、って数えて入りましたね、ほらいち、に、さん』と言いながら母親はT児の体を数の呼称に合わせながら揺さぶり、同時に自分の顔をT児の顔の上にさっと近づける。するとT児は満面の笑みを浮かべて『うあ！、うー、うーあ』と声を立てて笑った。それに引き込まれるように母親も穏やかな話しかけから嬉しそうな笑顔に変わり、『そうですか、Tちゃんも、いち、に、さん、ってやりますか』と言いながら再びT児の体を大きく揺すってやる……」

時間にすれば1、2分の短い関わりシーンであるがそこに居合わせている者にも、母子の情動交流が通底し

てくるのが感じ取れる事態である。

これとは対照的な事例を見てみよう。再びR・K児の事例である（Rが2歳7カ月のとき、プレイルームで保母が相手をして遊ぶ場面の観察より）：

「Rはプレイルームの床におお向けに寝て、ぼんやり天井の方に顔を向けている。そこにS保母がやってきて、『Rちゃん、おはよう、Rちゃん、おはよう』とRの顔の上に屈み込むようにして話しかける。RはS保母の方に少し顔を向けるが、しっかり見るという感じではない。『Rちゃん、ばあー、Rちゃん、ばあーしよう』とS保母が再びRの方にさっと顔を近づけてはまたさっと遠ざける働き掛けをした。Rが僅かに『うー』と声を出したようである（部屋の外の騒音で聞き取れない）。S保母が『Rちゃんも、ばあーしたね、ばあー、Rちゃんも、ばあー』とRが出したらしい声に意味付けをしながら、先と同じような関わりをしている。今度はRは声を出さずに、少し体をよじるようにした。『そうかね、面白かったかね』と保母は笑顔を見せてRを抱き上げながら、『Rちゃん、たかい、たかい、しょうか、ほら、たかい、たかい』『もう一辺しょうか、たかい、たかい』と言う。Rは空中に差し上げられたとき、はじめて、にっと笑ったような表情をした」

「Rはマットの上に足を投げだすようにして座っている。腰から後ろにはクッションが置いてあって軽く支える具合になっている。上半身は一応自由な感じであるが、投げ出した足にかなりの緊張があるようで、特に右足に突っ張った感じがある。そのせいか、上半身が何かごちない。Rは時々手の甲を口に持って行って嘗める。視線は何かを特に注視している感じではなく、むしろ焦点が定まらない感じである。S保母はRの正面に座って、小さなゴム製の人形を手にはしている。『Rちゃん、お人形さんですよ、ほら、可愛いでしょ、これあげます、はい』と人形を渡そうとするがRは手を出さない。が、ちらっと人形の方は向いた。S保母は人形をRの手のところに持って行って手に握らせる。Rはしばらくそれをぎゅっと握っていたが、特にそれを見るわけではない。S保母が次にどうかかわろうか、と一呼吸入れたときに、Rは不意ににっこりと笑顔をつくった」

このRの笑顔は、S保母と視線が合ったというのでも人形が面白いというのでも、あるいは体を揺さぶってもらって楽しかったというのでもなく、少なくとも観察者

には了解しえない仕方では不意に生じたものである。今の例からもうかがえるように、R児の生活全体のなかで、笑顔は表情パターンとしては決してないわけではない。しかし、それは情動交流的な通じ合える関係行動ではない。観察して感じたことを率直に言えば、文脈を欠いた不意の微笑みは、T・Sの事例とは対照的に、その微笑みの中に引き込まれるよりも、むしろ奇異な感じ、そういつてよければ不気味な感じさえ与える。Rの母親が「せめて目が合って、笑ってくれるといいのですが、そればかりを楽しみにやっていますけど」と言うのもうなづけるところである。

この二つの事例を対比すれば、情動通底、情動交流的な微笑みの母子関係形成に及ぼす意義は明らかだろう。

#### 〈「抱っこ——泣き止む」の関係〉

「あやす——微笑む」の関係は「愛着する——愛感する」を支える基底的関係であるが、これと並んで「抱っこ——泣き止む」という関係も、それを支えるもう一つの基底的関係である。乳児が泣くのは一般的には何かを要求してである。それゆえ母親の対応としては、その要求を把握し、それに応じた行動を取ることになるが、要求が何であるか不明なこともあり、また自分の対応によって必ず乳児が泣き止むとは限らないので、「泣き」への対応とその結果とは、母子関係形成にかなりの重要な意味を持つてくる。

実際、誕生後間もなくの母子関係において、「泣き」の意味が母親に明らかではないことは珍しいことではない。ただ、多くの場合、泣きの意味が「お乳が欲しい」「オムツを替えて欲しい」「抱っこして欲しい」「相手をして欲しい」という4種類程度に限られているので、この4つの関わりを試みれば（この場合でも、でたためにというのではなく、時間間隔を考えてもうそろそろミルクの時間だろうと予測し、まずはそれから試みる等の判断が自然になされるだろう）、大抵はそのどれかに対応していて、その結果、乳児が泣き止むという事態が生じる。「泣き」は母親の対応を促す「喚起力」を帯びており、この泣きがおさまると、対応する側には「ほっとした気持」が生じる。この「ほっとした気持」は母親には「強化」になり、ポジティブな（安堵と満足と自信の入り混じった）情動を喚起して、結果的に乳児への優しい関わりを導くだろう。その結果、また「あやす——微笑む」の関係に移行していくこともあり得る。

見方を変えれば、「泣き」は母子のあいだに異和作用をもたらし、母親には乳児が自分とは別個の主体であることを感じさせるものである。が、あやす行為を通して乳

児が泣き止んでくれると、それは母親の側に再び一体感をもたらすだろう。「ほっとした気持」は母親だけの主観内の事実であるばかりでなく、異和的、対峙的關係から通底的關係への転換がなされて「あいだが通じた」ことの間主観的な感じとしてあるものに違いない。これの繰り返しを通して（これが母子の生活を意味する）母親には抽象的な觀念の水準において、「この子は自分の手の内にある、どうしてやればいいのか分かる」とでもいうような、漠然とした育児への自信が生れるのではないだろうか。この自信形成のメカニズムは、直接観察によって証明することのできないものであるが、次のような母親の証言はそれをある程度示唆しているように思われる：

「最初の内は、M子の泣声と同じに聞こえて、ミルクかオムツかわからなくて適当にあれこれやっているんですが、ミルクでもオムツでもなくて、『えー、どうしよう』なんて思うんですけども、抱っこしたりあやしたりしているとそのうち泣き止んでくれて、『ああ、抱っこして欲しかったのか』なんて後で思うんですね。そのうち、泣いたときどうすれば泣き止むかが大体つかめるようになってきて、この子とは大体うまくやれるな、って感じられてきます」

「でも、どう関わっても泣き止んでくれないときもありません、そんなときには非常に自信がなくなります。どこか痛いんだろうか、病気になるかと、あれこれ心配したあげく、まあ抱っこしようかと腹を決めてこちらが落ち着くと、ふと泣き止んでくれて、そうするとすごく嬉しくなって……」

「これまでの育児で一番嫌だったのは夜泣きです。抱っこすると泣き止むけど、下ろすとまた泣き出して……翌日の仕事に響かないかなどと考えてしまうしもうこっちゃんが泣きたくなくなってしまいます」

育児ノイローゼの多くが夜泣きを伴っていることもこのメカニズムを間接的に裏付けていよう。

我々は「あやす——微笑む」「抱く——泣き止む」という2種類の行動的相互作用關係、および「可愛い——嬉しい」「ほっとする——満足する」という2種類の情動通底的、情動交流的關係を愛着關係形成の基盤をなすものとする。そして、これら2種類の行動的、情動的關係の繰り返しと積み重ねを土台として、より抽象的な水準において、「育児への基本的自信（母親側）——母親への基本的信頼（乳児側）」という主観的關係の基盤が形づくられるように思われる。

かくして、これまで述べてきた事柄をテーゼの形に表

わせば次のようになるだろう：

第3テーゼ：「愛着する——愛感する」は相互的である。

第4テーゼ：母親に対する乳児の愛着＝基本的信頼と、乳児に対する母親の愛感＝基本的自信は、母子關係の発達にとって重要な初期経験である。

誕生以来、授乳、オムツ替え、抱っこ、相手、等々の日常的な關係を通して次第に共生的かつ円滑な關係を築き上げてきた結果として、「子どもは基本的に自分の手の内にある」「お母さんがいれば基本的に安心である」という抽象的命題（本来は言語化しえない漠然とした感じ）が母子双方に形づくられる。これがErikson, E. H. (1950) 言うところの「基本的信頼」の内容であろう。このような母子相互の抽象命題がそれ以後の母子關係を大きく方向づけていくことは、十分考えられるところである。逆に、この頃までにこのようなポジティブな抽象命題を形づくることなく、むしろ「育児には基本的に自信がない：母親」、「お母さんがいても基本的に不安である：乳児」というネガティブな抽象命題を形づくる可能性も十分にある。それはまたそれで、それ以後の母子關係を方向づけていくだろう。

そのどちらの意味においても、つまり、生後3、4カ月頃に「愛着する——愛感する」關係が成り立つかどうかは、母子双方にとってcriticalな意味を持つ。第4テーゼはこの間の事情を言い表わしたものである。

\* \* \*

## おわりに

以上、誕生から3、4カ月までの母子關係を跡付けてきた。本稿における第II部は、筆者が別稿で準備を進めている初期母子關係の発達理論の一部を構成するものである。この理論において、母子關係は子どもの誕生以前から展開される。子どもの誕生はそれまでの夫婦關係に再体制化を迫る出来事であり、そのような意味で、子どもは夫婦の（あるいは家族の）欲望の場に生れてくるからである。

愛着關係は、従って、一人の子どもの発達の歴史と、一人の母親の母親としての歴史が交叉するところに成り立つものと考えられなければならない。

本稿では、第I部でAinsworthのstrange situationとの関連で愛着問題を考察し、1歳前後の愛着には母親に

対する両価的 (ambivalent) 感情が、少なくとも依存欲求が満たされないような場面において現出することがあることに言及した。しかしながら、第II部での展開は誕生から3、4カ月までのところにと及んだにすぎない。この数カ月間、母子は日常的な関わりを通して馴染みあい、そうしてようやく、「あやす—微笑む」という通底的な関係を築くに至った。これから先、母子は、一方で子どもの外界への旺盛な興味と、運動技能や認知機能の発達に導かれ (これとても子ども単独で可能なのではなく、母親の働き掛けの相関項なのだが)、他方で母親の調整的活動 (子どもの「自己」を調整していこうという活動) に方向付けられながら、次第に相手の意図を把握し、相手の意図に従った行動が取れるようになっていく。これはまた、母親の願いや意図と対立しつつ子どもが欲望の主体として次第に際立つようになる過程でもある。こうして、Piaget, J. (1936) のいう対象永続性が獲得される生後1年前後を迎えることになるが、ここにおいて愛着は、先にも見た複雑な様相を示し始める。分離不安や人見知りが話題になるのもこの頃からである。

こうして第I部での考察に繋ることになるが、それは別稿にゆずることにしたい。

### 参考文献

1. Abraham, K. (1916). The first pregenital stage of the libido. *Selected papers on Psycho-Analysis*. (London, Hogarth Press. 1927)
2. Ainsworth, M. D. S. (1969). Object relation, dependency and attachment: A theoretical review of the infant-mother relationship. *Child Development*, 40, 969-1026.
3. Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Walls, S. (1978). *Patterns of Attachment*. Hillsdale: Erlbaum.
4. Bower, T. G. R. (1979). *Human Development*. Freeman. (鯨岡峻訳 1982 ヒューマン・ディベロップメント ミネルヴァ書房)
5. Bowlby, J. (1951). *Maternal Care and Mental Health*.
6. Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss. Vol.1*. New York: Basic Books.
7. Brazelton, T. B., Koslowski, B. & Main, M. (1974). The origins of reciprocity. In Lewis, M, & Rosenbaum, L. A. (Eds.) *The Effects of the Infant on its Caregiver*. New York: Wiley.
8. Buxbaum, E. (1983). Vulnerable mothers-vulnerable infants. In Call, J. D. (Ed.) *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books.
9. Condon, W. S. & Sander, L. (1974). Synchrony demonstrated between movements of neonate and adult speech. *Child Development*, 45, 456-462.
10. Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton & Company.
11. Fairbairn, W. R. D. (1941). A revised psychopathology of the psychoses and psychoneuroses. *International Journal of Psycho-Analysis*, 22
12. Fairbairn, W. R. D. (1952). *Psychoanalytic studies of Personality*. London: Tavistock. (山口泰治訳 1985 人格の対象関係論 文化書房博文社)
13. Freud, A. & Burlingham, D. (1943). *Infant without Families*. New York: International Univ. Press.
14. Freud, S. (1905). *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. (懸田, 吉村訳 性欲論三篇 フロイト著作集 V 人文書院 7-94)
15. Freud, S. (1919). *Trauer und Melancholie*. (井村訳 悲哀とメランコリー フロイト著作集VI 人文書院 137-149)
16. Greenspan, S. I. (1981). *Clinical Infant Report: No.1* New York: International Univ. Press.
17. Harlow, H. F. (1959). Love in infant monkeys. *Scientific American*, 200, 68-74.
18. Klages, L. (1950). *Grundlegung der Wissenschaft vom Ausdruck*. (千谷七郎訳 1964 表現学の基礎理論 勁草書房)
19. Klein, M. (1932). *The Psycho-Analysis of Children*. London: Hogarth Press.
20. Klein, M. (1934). A contribution to the psychogenesis of manic-depressive state. In *Contribution to Psycho-Analysis 1921-1945*. London: Hogarth Press. 282-310.
21. 鯨岡 峻 (1986 a). 心理の現象学 世界書院
22. 鯨岡 峻 (1986 b). 母子関係と間主観性の問題 心理学評論 vol. 29, No. 4, 506-529.
23. 鯨岡 峻 (1988). 愛着するということ 教育と医学 2月号 慶応通信 23-29.
24. Lamb, M. E. & Hwang, C. P. (1981). Maternal attachment and mother-infant bonding: a critical



- review. In Lamb, M. D.(Ed.) *Infant Social Cognition*. Hillsdale, N. J. :Erlbaum.
25. Maccoby, E. E., Snow, M. E. & Jacklin, C. N. (1984). Children's dispositions and mother-child interaction at 12 and 18 months. *Developmental Psychology*, 20, 459-472.
26. Miyake, K., Chen, S., Ujiie, T. & Tajima, N. (1982). Infant temperamental disposition, mother's mode of interaction, quality of attachment, and infant's receptivity to socialization-interium progress report. *Research and Clinical Center for Child Development Annual Report 1981-1982*. 25-49.
27. Papousek, H.(1969). Individual variability in learned responses in human infant. In Robinson, R. J.(Ed.) *Brain and Early Behavior*. New York: Academic Press.
28. Piaget, J.(1936). *La naissance de L'intelligence chez l'enfant*. (谷村, 浜田訳 1978 知能の誕生 ミネルヴァ書房)
29. Rosenthal, M. K.(1982). Vocal dialogue in the neonatal period. *Developmental Psychology*, 18, 17-21.
30. Spitz, R. A.(1945). Hospitalism: An inquiry into the genesis of psychiatric condition in early childhood. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 1, 53-74.
31. Spitz, R. A.(1950). Anxiety in infancy: A study of its manifestations in the first year of life. *International Journal of Psychoanalysis*, 31, 138-143.
32. Stern, D. N.(1985). *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books.
33. Takahasi, K.(1986). Examining the Strange-Situation procedure with japanese mother and 12-months-old infant. *Developmental Psychology*, 22, 265-270.
34. Watson, J. S.(1973). Smiling, cooing and "the game". *Merrill-Palmer Quarterly*, 18, 323-339.
35. Winnicott, D. W.(1965). *The Maturation Processes and Facilitating Environment*. The Hogarth Press. (牛島定信訳 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版)